

主 題：私の信条①**聖書箇所：随所**

きょうはレジメと週報に使徒信条のことばが印刷されているはずですが、恐らく83年に私がここに来てから使徒信条について話をするのは初めてではないかと思えます。

《使徒信条》

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、

ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、

死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人の内よりよみがえり、

天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。

かしこよりきたりて生ける者と死にたる者とを審きたまわん。

我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、

からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。 アーメン。

この使徒信条以外にも本当のクリスチャンたちの信仰を定義しようとして、数々の信条が書かれてきました。これはその中でも最古の信条であり、最も大切なものでもあります。「信条」ということばも余り耳にしなないかもしれませんが、辞書によれば、「固く信ずる事柄」、また「キリスト教で中心的な信仰告白の表現、信仰の内容を簡潔に要約したもの」という説明がなされています。「信条」ということばはラテン語の“クレド”ということばに由来し、意味は「我は信ず」です。使徒信条と呼ばれるからと言って、この信条が使徒たちによって作られたものではありません。しかしながら彼らの教えを短く要約したものが確かに含まれています。彼らはこういったことを教え続けたのです。そして遅くとも4世紀までに我々が見ているこのような形になったと言われています。

「我は信ず」で始まるこの信条、なぜ「我々は」と言わなかったのか——。ここに書かれてあることが個人の信仰告白だからです。言い方を変えると、これこそが本物のクリスチャンが信じていることです。イエス・キリストの救いにあずかったクリスチャンたちが心から信じていること、それがこの中に記されています。もちろんこれだけを信じているわけではありません。しかし、少なくともこれらを信じていないのであれば、その信仰は疑わしいものです。本当の信仰者ならば私はこれを信ずると言うことができるはずですが、使徒信条に記されているものは、確かに聖書そのものが教えている内容です。英国の神学者であったクランフィールドという先生は、「使徒信条は、新約聖書の教えを簡潔かつ包括的に要約したものであり、それゆえにキリスト教信仰を理性に従って明確に理解するためにこの上もない助けとなる。」と教え、この使徒信条を通して、私たちは我々の信仰というもの、このみことばが教えていることをしっかりと知ることになると言っておられます。

【信条の重要性】

今から私たちはこの使徒信条を見ていくのですが、我々がこれを学ぶ理由を四つの挙げておきます。

1. 「聖書の教えの要約」

まず一つ目の理由は、ここには聖書の教えが要約されているからです。聖書によって一体何が教えられているのかが非常に簡潔にここに記されています。これまで私たちは、我々の信仰というのは聖書のみことばにしっかり立たなければならぬということを繰り返し学んできました。人間の考えでもないし、伝統でもない。我々の信仰はこの神のおことばに立たなければいけないのだと。私たちが何を信じるべきなのか、また何を信じているのかに確信を得ていくためには、この使徒信条をしっかり学ぶことです。そしてこの学びが間違いなくあなたのクリスチャンとしての歩みを助けるはずですが、私たちは神のおことばを学ぶ時に、そこに記されている真理が我々信仰者ひとりひとりの希望であることを信じていますよね。神様のおことばを学ぶことによって、神はこんなことを約束してくださった、こういうことが可能なのだと私たちはそこに希望を見出すのです。この使徒信条の学びは、間違いなくあなた自身の信仰の歩みの推進力となっていくはずですが、

また同時に、あなたがこの学びをすることによって、例えばだれかがあなたに対して「救われるためには何をしなければなりませんか」という問いかけをされたとするならば、あなたは彼らにこれを信じればいいのだと、そのことを教えて差し上げることができるでしょう。大変短い信条です。でもこの中に私たちが信じるべきもの、また私たちが語るべきものが要約されています。

2. 「真偽を知る助け」

二つ目の理由は、これが真偽を知る助けだからです。つまりいろいろな教えがなされる中であって、その教えが正しいのか間違っているのかを知るために、この信条に照らし合わせるならば、その教えが正しいかどうかを我々は見ることができます。主の再臨が近づけば、この世にはにせ教師たちが増し加わっていき、いろいろな教えが入ってくるということを我々は見してきました。Ⅱペテロ2：1でペテロが「イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現われるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、自分たちの身にすみやかな滅びを招いて」と言っています。初めて聞くことではありません。終わりが近づけば近づくほど、空中再臨になって地上再臨——イエス様が地上に戻って来られるその前にはこういう人々がたくさん出てくることを見てきました。

◎ 古典的自由主義（リベラリズム）

・有神論的進化論：人間が考え出したもの：カトリック教会・日本基督教団の多くの牧師

例えば20世紀になって、「古典的自由主義」という考えを持つ人々が出てきました。リベラリズムと言われていて、彼らがどんなことを教えたかという、その中の一つは進化論を神様のみわざの一例として受け入れたのです。それを「有神論的進化論」——教会でしか聞かないことばですけれども——と呼んで神様は進化の過程を始めたり監督されると考えたのです。創世記のみことばは明確に進化論は偽りだということを教えます。神がすべてをお造りになったのです。その後進化したわけでもないし、神が進化の過程を見ておられるのでもない。進化というのは人間が考え出した考えにすぎないのです。聖書はそれを教えていない。でも恐ろしいことに、こういう神学者たちがこういった教えを教会の中に持ち込んでくるのです。そうすると、間違いなく多くの教会はそういう教えに惑わされてしまう。

これは、ネットに出ていたのですが、カトリック教会は、爆発して宇宙ができたというビッグバンには創造主が必要とするが、進化論は特に否定しないというのです。また、日本基督教団のある牧師は、日本基督教団の牧師の95%が「有神論的進化論」の支持者であると言っています。つまりカトリック教会だけではなくて、日本基督教団の中の多くの牧師たちが進化論を支持していると。あの内村鑑三という有名な先生もこういうことを言っています。「神は進化の順序法則に従って万物を造り完成したもう」と。彼は進化論を積極的に肯定したと。

・逐語靈感説へのチャレンジ

私たちの周りにこういうことが既に起こっているのです。こういう教えというのはすべてみことばの権威にチャレンジしてくるのです。異端は、神様のおことばの権威に逆らうのです。こういった考え方を受け入れることによって、ある大切な教理が脅かされるのです。それは「逐語靈感説」という教理です。聖書の創世記から黙示録に至るまで、そのすべてのことばは神の靈感を受けて書かれたものであると聖書はそう言っていますでしょう？「聖書はすべて、神の靈感によるもので」（Ⅱテモテ3：16）と、神が私たちに下さったものです。ところが「有神論的進化論」やそういった考えを受け入れたリベラリズムの自由主義者たちは何をするかというと、聖書が神のことば、靈感を受けて書かれたのだということ否定するのです。聖書の中に部分的な誤りがあるという考え方をします。「聖書は記録を集めたものであり、その中には神のことばが含まれる。そのため信頼でき、守るべき真理を含んではいない。あらゆる時代またあらゆる状況において新たに解釈をしたり、また訂正を行わなければならない」と。彼らは永遠から永遠に存在なさる神様がこの聖書を我々に与えてくださったと、我々が信じている信仰に対して明らかにチャレンジするのです。聖書の中に誤りがあり、聖書はすべて神の靈感によって書かれたものではないと。もしそれを信じたら我々の土台自体がぐらついていくのです。

こうして神の敵たちはさまざまな方法をもって私たちの信仰をぐらつかそうとするのです。先ほどもお話したように日本基督教団のある牧師はこう言っています。「日本基督教団の牧師の95%が部分靈感を信じているのです。逐語靈感を信じていない」と。つまり聖書のすべてのことばが神のことばであるとは信じていないと。皆さん恐ろしく思いませんか？これは神に対する挑戦です。こういったことがもう既に私たちの国の中でも起こっているのです。

そういった誤った教えに対してそれが間違っていること、一体何が真理であるかということ私たちがはっきりと伝えなければいけない。そのためには私は何を信じているのか、その確信を持つことです。例えば皆さんがだれかに「あなたは何を信じているの？」と聞かれたら、少なくとも皆さんは「私はイエス様を信じている」と言われると思います。イエス・キリストが一体何をしたのか、この使徒信条に書かれている多くのことは皆さんご自分のことばで人々にお話になることができるでしょう。でも今から私たちが見ていく使徒信条は非常に大切なポイントを明記しています。例えば「父なる神」と言った時に、それがどんな方なのか、そのことを私たちに正確に教えてください。ですから恐らくこの学びを通して皆さんが信じていると思っていることがより強固なものになるし、それを通して皆さんが自

分の信仰においてより強い確信を持つことを願っています。だから人々が「あなたは何を信じているのか？」と聞かれた時に、使徒信条を何となく覚えて「これを信じています」ではなく、そこに書かれてある真理をしっかりとあなたが自分のものにして、自分の中でそれを反芻することによって、自分のことばで話すことができるなら、確実にあなたの信仰は強化されていきます。その時に、いろいろな間違っただけの教えに対して、それは違う、それは正しくない、あなたは真実と偽りを区別することができる。こういったことが我々の周りに起こっているということを我々は知らなければいけないのです。

◎ 教会内の問題

外部からそのような誘惑が入り込んで来る危険に私たちはさらされているのですが、実は同時に教会内にも問題があるのです。皆さんよくご存じのように、「人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め」（Ⅱテモテ4：3）ると。いいですか？終わりの時代になると、教会内から始まるのです。教会内から自分たちが聞きたいことだけを語ってくれる教師を集め、聞きたくないことを語る牧師たちや教師たちを追い出していこうと。だから教会は外部から来る攻撃に対して防御しなければいけないのですが、実は教会内にも注意しなければいけないのです。例えば皆さんが教会の中で何を求めるかと言った時に、一週間の勤めを終わって教会にやって来たら励ましのことばが欲しいとか、慰められることばが欲しいとか、罪や滅び、さばきというのを聞くと気持ちが重くなるから、そういう話は聞きたくないとするのだったら危険です。私たちが神様から求められていることは、時がよくても悪くても神のことばを語ることです。神が何をおっしゃっているのか——。私たちは、私たちの聞きたいことを聞こうとするのではない。我々が聞かなければならないことを聞く必要があるのです。ですから自分が聞きたい教えを提供してくれる教会ではなくて、自分が聞かねばならない神のみことばを教えてくれる教会、そんな教会を我々は目指さなければいけないのです。

でも悲しいことに、今多くの信者が求めているものは、教会に行き行って自分たちが聞きたいことを語ってくれる、そういった教会です。悲しいことに、罪やさばき、悔い改めなければいけないというメッセージが多くの教会からなくなったのです。語るのは天国と愛なのです。なぜなら人々はそれを聞きたがるからです。そうやっていくとみことばが教えているとおりに、そういうふうになっています。だから私たちは教会として、神様の真理を語り続ける、そういう教師たちを必要としています。

パウロはⅠテモテ2：7で「私は宣伝者また使徒に任じられ信仰と真理を異邦人に教える教師とされました。」とおもしろいあかしをしています。「私は宣伝者また使徒に任じられ」た、その目的は「信仰と真理を異邦人に教える教師とされ」るためだと。彼は神様から与えられた自分の責任をよくわかっていました。それは信仰と神の真理を異邦人に伝える、彼は異邦人に遣わされた使徒でしたから、それが自分に与えられた務めであると。

使徒13：4-10に、パウロたちがキプロス島に渡った時の話が出ています。この島全体を巡回してパポスに彼らが着いた時、6-8節「にせ預言者で、名をバルイエスというユダヤ人の魔術師に出会った。この男は地方総督セルギオ・パウロのもとにいた。この総督は賢明な人であって、パルナバとサウロを招いて、神のことばを聞きたいと思っていた。ところが、魔術師エルマ（エルマという名を訳すと魔術師）は、ふたりに反対して、総督を信仰の道から遠ざけようとした。」とあります。この総督は神のことばを聞きたいとした。そうすると、それに反対する働きが並行して起こっています。麦が蒔かれたら必ず毒麦が蒔かれるように、神の働きがなされようとする時に必ずそれを妨げる働きがなされるのです。9-11節「しかし、サウロ、別名でパウロは、聖霊に満たされ、彼をにらみつけて、言った。『ああ、あらゆる偽りとよこしまに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵。おまえは、主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか。見よ。主の御手が今、おまえの上にある。おまえは盲になって、しばらくの間、日の光を見ることができなくなる。』』と言った。するとたちまち、かすみとやみが彼をおおったので、彼は手を引いてくれる人を捜し回った。この出来事を見た総督は、主の教えに驚嘆して信仰にはいった。」とあります。何を見ていただきたいのかというと、このように福音の真理が人々に届かないようにいろいろな妨げがなされるし、それを聞きたいと思っている人々がそれを聞かないようにとする妨げの働きもなされるとということです。「偽りとよこしまに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵。おまえは、主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか」、これがサタンやその使いたちがすることです。こういった働きがいつもなされるのです。だから私たちは神様の真理に立たなければいけないし、そのためには真理を語る人々が必要なのです。教師たちが語って、群れにつながる者たちがそうでないというのでは悲しいですね。イエス・キリストを信じる私たちは自分が何を信じているのかをしっかりと持っているゆえにその真理を語り続ける。あなたも私もそのような信仰者になっていくために必要なのは、みことばに立つことであり、この使徒信条はまさにそれを助けてくれるものです。我々は何を信じているのか——。そのことを簡潔に記してくれています。

3. 「礼拝生活の原動力」

三つ目は礼拝生活の原動力になっています。自分が何を信じているのかを思い起こすことによって、心からの礼拝を捧げるきっかけとなります。この使徒信条を我々が見ていくと、私がどのような神を信じているのかがチャレンジされます。私は神を信じる……そんな漠然としたものではない。

私はどんな神を信じたのか——。一体聖書はどんな神を教えているのかを知ることになります。

また神は私のために何をなしてくださったのか——。神ご自身が人となってくださった、受肉の話が出ています。身代わりとなって十字架に架かってくださったことが明確に記されています。

神は私のために今何をしてくださっているのか——。とりなしをして、祈ってくださっていると。

神は私のために将来何をなしてくださるのか——。さばきをくだされると。神様は私に信仰者として褒美を与えてくださる。

そしてどんな永遠が私に約束されているのか——。よみがえって永遠のいのちを楽しむことと。

そのような真理がこの信条の中に記されている。なぜこれが礼拝生活に役立つかという、我々がそれをいつも覚えることによって当然心の中から神に対する感謝が出てきます。感謝のない礼拝を神様はお喜びになると思います？この場に座っておられても、その心が正しくなければあなたの礼拝に対して神はノーサンキューですよ。だから私たちの心が神に対して感謝にあふれているならば、その感謝にあふれた心が、神がお喜びになる礼拝を捧げていくのです。そのためにも神がどんな方であり、どんなことをなしてくださったのか、またどんなことをするのか、どんな約束を与えられているのか、その真理を私たちが思い起こすことによって、少なくともこの真理は私たちの心を励ましてくれる。その真理が私たちの心に感謝をもたらしてくれる。この神のすばらしさを覚えるということは、心が感謝にあふれるためには必要です。そして心が感謝にあふれることが神に喜ばれる礼拝を捧げるために私たちが忘れてはならない必須条件です。

4. 「信仰の要約」

もう一つ挙げるとしたら、ここには確かに信仰の要約が記されています。先ほどもお話ししてきたように、自分が一体何を信じているのか——。この信条は私たちに明確にそのことを教えてくれます。恐らくそれをしっかり覚えておられる皆さんは共通して救われたことを喜びながら、その救いの確信を持って歩んでおられるでしょう。私はこの真理を信じていると。

【使徒信条：その内容】

では、さっそくその内容を見ていきましょう。

◎ 恵みによる救いと私たちの選択

まず最初に「**我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず**」とあります。「**我は……信ず**」ということばでこの信条は始まります。真のクリスチャンが信じている神の説明がされています。私はこれを信じている、でも実際そのことを信じるのができたのはすべて神様の恵みです。私たちが何度神の真理を聞いていても、その真理を心から受け入れる決心に至ったのは、神があなたや私の心に働いてくださったからです。しかし、この信条は私たちに人間の個人的決断という責任を教えます。つまり何度も見てきたように、すべて神の恵みなのでしょう？だったら救われた人たちは神の恵みによって救われたことを喜び、そうでない人は私が救われなかったのは神様が私を選んでくれなかったから私は滅ぶのです、神が悪いということになります。しかし、そういう言い訳はできないと聖書は教えています。

なぜかというと、確かに神の選びが教えられているのですが、同時に人間の選択の責任も教えられているからです。福音のメッセージを聞いた時にそれをどうするのか、神はその人に対して問いかけておられるのです。拒み続けていくのか、罪を悔い改めて神が備えてくださった救いを受け入れるのかです。悲しいけれども、多くの人たちが語られている内容を理解していないのではないのです。言っていることはわかるのです。その内容を理解していながらも悔い改めて神を信じて従うのではなくて逆らい続けるという選択をし続けていると。それは神の責任でしょうか？いいえ、それはその人の選択です。聞いても信じない、理解しても必要と思わない。この選択の責任ゆえに神を退けて救いを拒んだ人にはさばきが約束されているのです。ですからもう皆さんおわかりのように、救いということを考えた時に神様の選びというものがあるし、同時に我々の責任というものも存在しているのです。神の前にこの二つは矛盾していない。私たちの頭は矛盾しているかのように思うのです。でもそれが神様が私たちに教えてくださったことです。

◎ 三位一体の神

この信条の1行目を見ると、「**我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず**」とあります。つまり私は「**信ず**」、「**クレド**」というラテン語の話をしました、信条のことです。そこには「**私は……信ず**」と言っているのです。何を信じているのかというと、1行目に出てきているのは、「**父なる神**」を信じるということです。その神の説明がなされています。2行目「**我は……信ず**」なのです。では何を「**信ず**」かということ、「**イエス・キリストを信ず**」なのです。「**独り子……イエス・キリストを信ず**」る。

そしてその後3行目からその方についての説明がずっと続いています。8行目「我は……信ず」とあります。何をかという「聖霊を信ず」と。ですから「父なる神を信ず」、子なる神を「信ず」、「聖霊を信ず」と。つまりこの信条がしていることは、真のクリスチャンというのは三位一体の神を信じているのだと告白するのです。

皆さんもご存じのように、聖書は私たちに神はおひとりだと言います。そのおひとりである神様は父、子、聖霊の三つの位格であられるのです。それぞれにその人格があるのです。それぞれが知性と意思とを備えておられる。それでいてひとりの神だと言っておられるのです。ですから聖書が私たちに教えてくれる神という方はどういう方かという、我々がどう思うかではないのです。聖書は私たちに父、子、聖霊の三つの位格があられるひとりの神がいると教えているのです。それぞれが同様に神なのです。それでいてひとりの神なのです。それぞれが永遠に存在なさっておられるのです。ある時からだれかが存在するようになったとか、ある時にだれかが創造されたとか、そんなことを言っているのではない。永遠に存在される唯一まことの神だと。今何を言っているかという、この信条が私たちに教えてくれるのは、この聖書が私たちに示してくださっている神様がどんな方なのかということです。聖書が私たちにこの真理を示そうとされたのです。この聖書が我々に教えてくれているのは、あなたや私を造ってくださった神様がどんな神であるかです。繰り返しますが、父なる神、子なる神、聖霊なる神がひとりの神なのです。三つの位格というのはそれぞれの知性を持っておられ、意思があり、それでいてひとりの神だと。

なぜこういう説明しかできないかという、残念ながらこの三位一体の神というのは我々人間が考えつくことができない神です。我々の周りに存在する、我々がこれまでに手を合わせてきた存在を見ると、過去の偉人や自然の驚異、その美しさに感動した時にそれらを崇拝の対象としたものです。そういう話を聞くと納得できるのです。神社に行くと大きな木があって、しめ縄がくくられていてご神木だと言われたら、そうだな、不思議だなとか、すごいなと言ってそういうものを崇拝する。そういう思いというのはわかります。かつて偉人がいたら、そういうところが何かご利益が得られるのではないかと崇拝の対象になる。しかし、今私たちが見てきたように、神は父であり、子であり、聖霊であり、それぞれ意思をお持ちであり、それぞれ人格を持っておられるひとりの神様だと言われたら、私たちの頭の中ではそれはどういう意味？と思うのです。なぜこんなことを言っているかという、それが聖書が私たちに明らかにされた神だと言っているのです。つまり私たちの頭で想像することもできない、考えることもできない、それを遥かに超えた神なのです。でも感謝なことに聖書が私たちに神とはどういう方であるか、我々が絶対に生まれながらに知ることがない、この聖書がなければ、神が示そうとしてくださなければ絶対知ることのない神を我々に明らかにしてくださった。もちろん我々は神がお造りになった自然界を通して神がおられることは考えます。ローマ書を見れば、私たちは神がいらっしゃることを知っています。でもこうして聖書を通してその方がどんな方なのかを我々に示してくれたのです。神がこの真理を明らかにしてくださったゆえに私たちはそれを知ることができると。

A. 「父なる神」

1. 「全能の父なる神を信ず」で始まるこの信条

1) イエス・キリストの父

もう一度見ていただきたいのは、日本語では「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」と訳されている。最初は「全能の父なる神を信ず」というところから始まります。まず「父なる神」ということばが出ています。どんな神様なのか——。イエス様が地上に来られた時に何をなさったかという、この「父なる神」に従っていかれました。イエス様が地上におられる時に何を望んだかという「父なる神」のみこころを行うことでした。そして「父なる神」もイエス様に対してどんなふうにお答えになったかという、イエス様がバプテスマを受けた時と山上の変貌の時と2回天から声がしたと記されています。「これは、わたしの愛する子」、マタイ3：17です。「父なる神」と子なる神イエス様との父と子の関係ですよ。どんなふう「父なる神」が子なる神、イエス様を愛していたのかと。パウロもエペソ1：3に「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように」と記しています。「イエス・キリストの父なる神が」と書いてあります。「父なる神」と子なる神であるイエス様との関係、父は子を愛し、子も父を愛して「父なる神」のみこころに従っていたと。では二人の神がいるのか？いいえ、ヨハネ10：30「わたしと父とは一つです。」とあります。今我々が見てきたように、確かにそれぞれ意思もあるし、人格を持っておられる。ただそれでいてひとりの神なのです。これが神が聖書を通して明らかにされたご自身なのです。あなたや私が納得できるかできないか、そんなのはどうでもいい話です。神様は感謝なことにご自身がどういう存在なのかを明らかにしてくださっている。それが今私たちが見ているところです。

2) イスラエルの父

また「父なる神」と言った時に、これは神とイスラエルの関係でもそのように記されています。「父なる神」がちょうど父が子を愛するようにイスラエルを愛したと。アッシリアの捕囚があった時期、北王国イスラエルの話です。イスラエルに対する神様の愛がこう書かれています。「主は遠くから、私に現われた。『永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。』、エレミヤ31：3です。「わたし」、つまり神が「あなた」、イスラエルを「愛した」と。でもその神に対してイスラエルがどういう態度でもって生きたのかというと、繰り返し出てきているように逆らい続けるのです。ホセア11章のところでもそのことが記されています。イスラエルは神に逆らい続けたけれども、ちょうど父が子を愛するように、神はイスラエルを愛したのです。

「父なる神」と子なる神イエス様の関係に見ることができし、また神とイスラエルの関係にもこのことを見ることができます。そして同時にこの方は私たちの父でもあられると。

イエス様が祈りを教えてくださいと問われた時に教えた祈りがありました。一般的には主の祈りと言われているものです。主が教えられた祈りです。主ご自身が祈られた祈りはヨハネ17章に出てきます。マタイの福音書6：9にこう祈りなさいとイエス様が言われた時に、最初に「天にいます私たちの父よ」と言いなさいと言われます。これは何を意味しているのでしょうか？見てきたように、「父なる神」が子なる神様イエス様を愛してくださった。「父なる神」がイスラエルを自分の子を愛するように愛してきた。そして、「父なる神」があなたのことを愛してくださっている。ですから皆さんよくご存じのヨハネ3：16に「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された」とあります。父が子を愛するように。ヨハネ15：9に「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。」と出てきます。Iヨハネ4：10では「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し」と。

この使徒信条を見る時に、「全能の父なる神を信ず」、「父なる神」を信じると。まさに父なる神が子なる神を、イスラエルを愛されたように、こんなに私を愛してくださっている。その神を信じているということです。

3) 全能の父

(1) 全能：どんなことでもできる方

続けて「全能の父」と出てきます。これはヘブライ語で“エル・シャダイ”ということばがあります。全能の神という意味です。「エル」は神で「シャダイ」というのは全能です。創世記17：1で「アブラムが九十九歳になったとき主はアブラムに現われ、こう仰せられた。『わたしは全能の神である。』と。この後100歳と90歳との間に子どもが生まれるという話です。その約束を受けてから25年間待ってきたのに何も起こらなかった。そして創世記17章になった時に神は「わたしは全能の神である」と言われるのです。その後、アブラハムもサラも生物学的に見て子どもが生まれるなんて絶対にあり得ないと。でも神は「わたしは全能の神である」と言われたのです。つまり「全能」ということは神の前に不可能なことはあるのですか？神に不可能なことがあるのだったら神は「全能」ではないのです。ご自身が「全能」だと言われた以上、その方にできないことは何一つない。それが「全能」という意味でしょうか？アブラハムたちに対して神は「わたしは全能の神」だと言われたのです。でも現状を見た時に絶対にあり得ないとだれもが思うことです。そこで神は人間では絶対にあり得ないことをされたのです。そのことを通してご自身が「全能」のお方であることを明らかにしたのです。

(2) 全能：どんなことでも行う権利を持つ方

どんなことでもお出来になるだけではない。どんなことでも行う権利をこの方は持っているのです。ネブカデネザル王様が神様からのさばきを受けます。というのは彼が自分の力が王国を築いたと自分のことを高ぶったからです。さばきを受けて7年後に自分ではなくて神をあがめるのです。ダニエル書4章の中にそれが出てきます。35節に「彼は、天の軍勢も、地に住むものも、みこころのままにあしらう。御手を差し押えて、『あなたは何をされるのか。』と言う者もない。」と。つまり神様がご自分のなさることをご自由になさるのです。その神の「御手を差し押えて、『あなたは何をされるのか。』と言う」人もいないと。そんな権利を持った人はだれもないのです。神様、再考してくださいとか、ちょっとそれはおやめになった方が……と。神様はご自分がなさろうとすることをすべてなされるし、その権利を持っていてだれもそれを妨げることはできないと。これが神なのです。これが「全能」のお方なのです。どんなことでもできるし、どんなことを行う権利も持っておられるのです。ですからネブカデネザルは主はすべてのことを治めておられることを告白します。主は望まれていることをどこでも行われることを告白するのです。だれにも神のしておられることをやめていただいたり、神に尋ねる権利も持っていないのです。彼はそのことを告白するのです。

あなたがお信じになっておられる神はそういう方なのです。約束されたことを確かに守るから「全能」、それだけではないのです。この方はご自分の権利に基づいて、ご自分のみこころをなされる方なのです。そしてだれひとりとしてそれを邪魔することはできない、そんな権利はだれにもないのです。

この方は神なのです。詩篇 115 : 3に「私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる。」とあります。これが神なのです。

ここにあるように「全能の父なる神を信ず」、私は「全能の神」を信じている。私の信じている神は父が子を愛するように私のことを愛してくださり、この方はどんなことでもできるし、どんなことでも行う権利を持っている。恐らくその方を正しく受け入れているのであれば、私たちの日々の生活に影響を及ぼすと思いませんか？つまり私たちの周りに起こるすべてのことに対して、私たちは主のみわざがなされていることを信じているゆえに、その主のみわざがどんなふうにご自身の栄光に至らせてくれるのか、期待しません？神が全能であられ、つまりやめようと思ったら神様はおやめになるのです。やろうと思ったらなさるのです。そして神は常に最善をなされるのです。だれもとめられないのでしょうか？そんな神によってすべてのことが支配され、すべてのことが導かれているのです。その真理を知ることによって、我々クリスチャンは日々起こるさまざまなことに対して「なぜですか、神様」とか、「どうしてこんなことを」とか、はっきり言ってそんな権利はないことを覚えなければいけない。なぜかという、我々は何もわかっていないからです。でも少なくとも私たちがわからなければいけないのは、私の神は全能の方なのです。「全能の父」なのです。こんなにも愛してくださり、そしてどんなこともおできになり、なさることはすべて完璧であり完全であると。この方がなさろうとされたことは絶対成るのです。それはすべてご自身の栄光のために。

我々信仰者はこんな方にすべて委ねて生きることができるのです。ですからこの方がなされるすべてのことに対して私たちは少なくとも「神様、わからないけれども、感謝します」、「なかなか受け入れ辛いですけれども、感謝します。なぜなら神様あなたは全能の方だから」と。そのような正しい応答をもって歩むならば私たちの日々の生活は変わると思いませんか？多くの信仰者が日々の生活に起こるさまざまなことをひょっとしたら神様の前に不満として語っているかもしれない。神の前にいろいろな不満や不平を述べているかもしれない。皆さん、信仰者である私は覚えなければいけないのです。我々の神様は全能の方だと。これがあなたや私の神なのです。この方を信じたのです。なんと感謝なことかです。私ができる、わからないはどうでもいいのです。私は神様に問いかける、そんな資格もないのです。神は私たちに問いかけられます。あなたの人生がどうだったのか——。そして我々はそれに答えなければいけない。でも神は私たちがたとえ問いかけたとしても、それにお答えになる必要はないのです。なぜなら神はご自身が常に最善をなしておられるからです。そんな神なのです。我々クリスチャンはそんな神を信じているのです。それがこの使徒信条の中に告白されているのです。

私たちが今まで思っていた神よりも何百倍も何千倍もはるかに大きく偉大な神だと思いませんか？だから私たちはこの神をこうして覚えることによって、我々の日々の生活にこの真理が影響を与えてくれるのです。救われたことが感謝だと思わないですか？こんな神の御手のうちに置かれていることが。こんな神がすべてを導いてくださることが。

来週、私たちはこの使徒信条のすべてを見ていきます。願わくば皆さん、この一週間、使徒信条をぜひお読みください。これが私の信仰なのだ、私の信条なのだ。全能の父である方を信じたあなたは、その方を仰ぎ見て、その方をたたえながら感謝を持ってこの一週間は歩んでいきましょう。